

〈動物〉をめぐる考察とポストヒューマン・エシックス

根 村 直 美

Abstract

This paper explores Birke and Holmberg's discussion of feminism and animal studies. Their analysis of animal identities guides us to see animals as complex and fluid subjects within their interactions with humans. Their analysis of embodied social relations provides insight into the basis for becoming animals and humans as subjects as lying in intercorporeality or the connection of the material dimension making humans and animal subjects. Their analysis of power and responsibility indicates that the asymmetry between relations of humans and animals calls for an ethics of care.

In this paper, we also compare the arguments of Birke and Holmberg with Nayar's idea of species cosmopolitanism, clarifying its core thought from the standpoint of Nayar's critical posthumanism. Furthermore, we shed light on the meaning of the concept of response and responsibility in species cosmopolitanism for Nayar. We conclude that the first step in an ethics of care for Nayar is to be "in relations of mutual consumption and dependency, but without reducing some species into objects to be ruthlessly exploited without ethical dilemma (Vint, 2010)."

キーワード：動物 ポストヒューマン・エシックス 種のコスモポリタニズム

I. はじめに

ポストヒューマン・エシックスの大きな焦点の1つが、人間以外の生物学的存在としての〈動物〉と人間の関係の捉え直しである。たとえば、これまで取りあげてきたプラモード・K・ナーヤルにおいても、「種のコスモポリタニズム」といった概念が提示されている (Nayar, 2014)。ナーヤルの「種のコスモポリタニズム」という概念は、必ずしも生物学的存在ばかりを射程とするものではない。その射程には非生物学的存在も含まれている。しかしながら、その概念が、人間と人間以外の生物学的存在との新たな関係性を探究する必要性を提唱するものであることは確かである。本論では、主として、クリティカルなポストヒューマニズム (critical posthumanism) の立場に立つとき、人間以外の生物学的存在とし

ての〈動物〉と人間の関係、そして、両者の間の倫理に関して、どのようなことが言いうるのかについて若干の考察を試みる。

その際に、参考にするのは、アニマル・スタディーズとフェミニズムの関連を論じたリンダ・バーク（Lynda Birke）とトラ・ホルムバーグ（Tora Holmberg）の論文“Intersections: The Animal Question Meets Feminist Theory”（Birke and Holmberg, 2018）である。クリティカルなポストヒューマニズムは、アニマル・スタディーズとフェミニズムのいずれからもから多くを取り入れつつ展開してきているが、本論では、バークとホルムバーグの論考と照らし合わせるにより、ナーヤルの「種のコスモポリタニズム」という概念についてどのような洞察を得ることができるのかを明らかにしていきたい。

なお、その考察に際しては、‘動物’という語を、前述のように、人間以外の生物学的存在としての〈動物〉という意味で用いる。ただし、繁雑となることを避けるため括弧はつけないこととする。また、本論では、バークとホルムバーグの論文で展開されている議論を扱う際には、本文中の括弧内に該当する頁数のみを入れることとする。

Ⅱ. 「主体」としての動物と交差性

本節ではまず、バークとホルムバーグの論考が、動物を「主体（subject）」として位置づけていることを示すとともに、人間と動物の関係性を他の抑圧と絡み合う1つの抑圧の軸として交差的に捉えていることも明らかにする。

1. 主体としての動物

バークとホルムバーグがポストヒューマニズム的な考察にとって不可欠と論じるのは、動物を、人間との関係の網の目の中のアクター、すなわち、主体として捉える考えである。

バークとホルムバーグによれば、はじめて動物と人間の関係に焦点を当て、関係の網の目の中の動物を、社会的なアクター、つまり、多様な仕方人間と関わったり、あるいは、関わったりしない主体として位置づけたのは、ヒューマン／アニマル・スタディーズである（p. 118）。また、バークとホルムバーグは、ヒューマン／アニマル・スタディーズが焦点をあてたような相互的で身体的なコミュニケーションは、ダナ・ハラウェイ（Donna Haraway）が“伴侶種（companion species）”と呼ぶような動物（Haraway, 2003, 2007）と我々の関係にとって重要であると論じる（p. 118）。バークとホルムバーグによれば、ハラウェイは、犬と人間関係を例にとり、その関係の歴史においてお互いが分かち難くあることを強調し、関係的な倫理の必要性を提唱する（p. 118）。すなわち、我々人間は、特定の犬と1対1の友情を通してばかりでなく、ブリーダー、ペットフード製造者から公園管理者まで、関係の網の目の様々な次元で関わり合うことを通じて、多様で絡まり合った仕方犬と関係をもっているのである（p. 118）。

バークとホルムバーグの考えでは、人文学、社会科学、政治学はすべて、伝統的に動物を排除してき

ているため、こうした関係の網の目に中にある動物を社会的なアクター、すなわち、主体として明確化することは、人文学、社会科学、政治学に多くの問題を引き起こす（p. 118）。バークとホルムバーグは、この排除はフェミニズムにも当てはまるとしつつも、次のように論じる（p. 118）。すなわち、フェミニストの関心とヒューマン／アニマル・スタディーズは、異なる軌跡をもち時として緊張関係があったにもかかわらず、強い類似性をもっており、フェミニストのうちにも異なる種の間関係性を理解するのに必要な理論的な土台がある。そして、それは、グローバルなレベルから個人同士のレベル、制度のうち、あるいは、有機体のうち、歴史的関心から現代的関心、さらには、将来的な関心まで、多数の領域と尺度にわたるものなのである。

2. 交差性

このように動物を主体と捉えるバークとホルムバーグが、人間と動物の関係性が性差別を含む他の抑圧と深く関係し合っていることを明らかにするための概念として展開しようと試みるのが、「交差性（intersectionality）」である。バークとホルムバーグは、フェミニスト・スタディーズもヒューマン／アニマル・スタディーズと同様、種を含む交差性について議論する必要があるとし、以下のように論じる（pp. 118-119）。

ジェンダーと動物性の間関係は、何人かのエコフェミニストの著者たちによって探究されており、その著者たちは、女性と動物が下位に置かれるようになる仕方を指摘してきている。また、そうした仕事とならんで、イデオロギーの自然化、とりわけ、女性と動物の結びつきを示すイデオロギーの自然化への抵抗も行われてきた。それに関連することであるが、セックスとジェンダーの区別は、動物理論の切り離しに貢献してきており、動物は、セックスと同様、確固として“自然”に属するものと見なされたのである。しかしながら、その区別は、多くの方法で反論が試みられてきた。すなわち、その区別に対しては、たとえば、実験室動物の文化としての認識から、“自然文化”とも言うべき絡み合いについてのハラウェイの主張に至るまで反論が試みられてきている。かくして、今や、人間の例外主義は、社会的に構築された秩序であり、自然化されたイデオロギーであって、それが種に関する社会的な規範を維持していると理解されているのである。

「交差性」という概念は、人間と動物の関係に対してフェミニスト的でポストヒューマン的なアプローチを提供し、様々な形式の自然化された社会秩序について考えることを可能にする。交差性に関するフェミニストたちの理論は、ジェンダー、人種、階級、セクシュアリティの複雑な関係を探究する方法を提供していることは確かである。しかし、それらは、一般的に人間ではない存在を無視しており、人間の権力（power）がいかに物質的に動物の身体を通じて構成されているかをまれにしか考えないがゆえに、問題がないというわけではない。

そして、まさにそうした考察をもたらすことがヒューマン／アニマル・スタディーズのフェミニスト的探究への貢献である。フェミニストは、種の多様性についてあまり扱ってこなかったため、あるいは、人間ではない存在の搾取がいかに他のシステムと関わっているか、また、それらがいかに互いを構成し

て合っているかを探究してこなかったため、こうした試みはかなり挑戦的なものである。

これらの問いはまた、種がジェンダー／階級／人種、その他の権力の構造と交わるものと見なすことを可能にし、人間と動物の関係を、交差的でパフォーマティブなものとするを可能にする。人間と動物の関係は、アナロジー的というより交差的であり、交差する異なる権力関係の軸が実践と言説を変化させているのである。

Ⅲ. 3つの論点

バークとホルムバーグはまた、人間と動物の主体性と交差的な関係性を際立たせるために、3つの論点を取りあげている。本節では、その3つの論点について明らかにする。

1. アイデンティティ・ポリティックス

バークとホルムバーグは、種をそれ自身関係的なものとして理解することは、相互作用がどのように構築されるのか、カテゴリーがどのような設定されるのかという問いを引き起こすと論じる (p. 119)。しかも、コンパニオン・アニマルと我々の関係性は、ジェンダーとアイデンティティについての諸々の観念を背負わされていると述べる (p. 119)。

バークとホルムバーグは、その1つの例としてカナダのドキュメンタリー「キャット・レディ」を挙げている。その番組に関して、バークとホルムバーグは以下のような分析を行う (pp. 119-120)。

その番組には、2つの相反する女性と猫の関係性が示される。1つは、欠落を猫で満たしており、しばしば孤独で、病んでいる、あるいは、変わっていると見なされるマーゴットという女性の例である。もう1つは、132匹の猫の世話をし、自身の人生のコントロールを失い、猫が今やその人生を支配しているダイアナの例である。

この番組は、種をまたぎ、また、交差的であるようなアイデンティティの特徴をいくつか利用している。ダイアナは、ストレスにさらされ、猫のように走り回っているが、同時に環境の犠牲者として描かれている。ジェンダーと階級が動物化の過程と相互に関係し合っており、その結果、ダイアナは、支配する猫との関係において救いのない女性となっているのである。対照的に、マーゴットは、猫を子どもの代わりに“母親のように育てる”十分な状態ではない女性として登場する。そのうえ、家庭 (home) と呼ばれる場所も2つの物語で相当異なって見える。マーゴットのアパートメントは、女性的で、母親として猫を育てるアイデンティティと重なり合っているように見える。それに対して、ダイアナのカオス的な家は、猫の生活によって支配される、厄介なアイデンティティ、すなわち、ホームレスではないが、家のない女性というアイデンティティを生み出している。

これらのキャット・レディたちが、家庭に閉じ込められ、非合理的でコントロールを失っている状態に見えるとき、彼女らはまた、人間の地位を失っているように見える。そして、同じ種との関係性が欠如しているがゆえに彼女らが人間性を失っているとすれば、猫たちはペット性を失っている。ケージの

中の猫がシャーと言うのは、飼いならされ従順なねこちゃんのイメージとは衝突する。人間によって創り出され育てられた猫でさえも、ペットの理想化されたイメージを打ち破る。それらの例は、明確に、ペットのカテゴリーは人間というカテゴリーと同様、偶然的な位置であり、その境界線は動きうるし、交渉によって設定されることを示している。

これらの物語において、猫は、犠牲者であり虐待者であり、また、感情をもつ主体（sentient agent）でもある。こうした具体的な権力関係に対するフェミニスト的な分析は、それらの物語に明らかに見られる、ジェンダーと感情的であること（sentimentality）の間の結びつきに疑いを投げかけるであろう。また、ヒューマン／アニマル・スタディーズの観点からするならば、一方で、軽薄で、ずるく、神秘的であり、他方で、母親的で、家庭的という猫の表象は、歴史的に、女性的なもののアイデンティティが、コントロールできないもの／徳にあふれる母というように分裂してきたことと重なり合っていることを付け加えることができるであろう。

バークとホルムバーグは、キャット・レディに関する考察を次のように締めくくる（p. 120）。人間のカテゴリーは、イデオロギー的、歴史的、実践的に、非人間性からの分離を条件とし、一方で、依存している。同様に、“動物”（ここでの引用符は原文にしたがった）というカテゴリーは複合的であり、かつ、ジェンダー化されている。表象が人間、動物、自然や社会についての規範的なナラティブを構成し、表象はそれらによって構成されているが、“動物”のアイデンティティの構成において、我々は人間の例外主義を生み出している。皮肉なことに、フェミニスト理論が強く相違を強調してきた際、安易に動物を単一の他者として再生産してきた。しかしながら、キャット・レディの例が強調しようとしたように、アイデンティティは複合的で流動的である。交差性という概念は、近代性、純粋化、分類学、アイデンティティ・ポリティックスに対してより広い批判的なアプローチを含み、転覆的で代替的なパフォーマンスの提示を目指すものでなければならないのである。

2. 身体性

バークとホルムバーグが次に取りあげるのは、「身体性」の問題である。フェミニスト理論にとって身体性は長く大きな関心事であり続けているが、ヒューマン／アニマル・スタディーズの学者たちもまた、種の間のコミュニケーションにいかに関係性と情緒（affect）が影響をもっているのかを探っている（p. 120）。

バークとホルムバーグは、フェミニスト理論においても、ヒューマン／アニマル・スタディーズにおいても、多くの文脈で身体が互いに相互に影響し合っているかを言うために、“間身体性（intercorporeality）”という概念が用いられているとし（p. 120）、次のように論じる（p. 121）。間身体性には、たとえば、食べることによりある身体を他の身体へと組み込むことや、“伴侶種”によって意味される無数の関係、イボヤギと科学者の関係、乗馬のような1対1の身体的活動が含まれる。そうした様々な文脈は、社会的関係性が深く身体化されていることを伝えている。人とであれ他の動物とであれ、とりわけ非言語的な他者とのコミュニケーションは、身体を使うこと、すなわち、間身体的になる

ことを意味するのである。

さらに、バークとホルムバークは、キャロル・スマート（Carol Smart）が“身体的な認識法（bodily ways of knowing）”と呼ぶ方法（Smart, 2011）に触れ、人間ではない動物と関わる際に重要なのは、まさに身体化された認識の方法であり、それらの方法こそが、種の間コミュニケーションを媒介するとともに、身体とその振る舞いを通じて、権力を明らかにすると述べる（p. 121）。そして、次のように言う（p. 121）。我々は、他者の行為を認識する中で、その他者と関わる。すなわち、それらの社会的な出会いの中で自身が生成すること（to become）はまた、身体と成ることであり、それが誰でありその認識の技術がどのようなものであれ、自身が他者の生成に資するようになることである。このことはつまり、種のラインを超えて身体を読み解き理解するということにとどまらず、他者の身体を動かし他者の身体に影響を及ぼすこと、ひるがえって自身が動かされ影響を受けるということを意味する。

バークとホルムバークは、我々が人間と犬の相互行為を見ると、多感覚的な対話が生じていることは明らかであるとし、マーク・ヒギン（Marc Higgin）の盲導犬とその利用者の研究（Higgin, 2012）について次のように述べる（p. 121）。ヒギンの研究では、両者は、他者を認識するためにリズムをもって歩くことを学ばなければならないと記されている。すなわち、ヒギンの強調するところでは、盲導犬とその利用者の身体的な理解は情緒的な（affective）ものであり、影響し影響される能力を反映している。言い換えれば、身体的な関わり合いを経験することを通じて、情緒が関係的、そして、身体的に生み出され経験されるのである。

また、バークとホルムバークは、身体性と相互のコミュニケーションの明確な例は乗馬であるとして、次のように論じる（pp. 121-122）。乗馬は、人間と動物の直接的な接触と身体的な動きを含むものである。乗馬者は、雄弁に、馬と“1つ”と感ずること、シンクロして動いていると感ずること、一方の身体の中で他方がいかに動くかを予期し認識することを語る。それは、馬と人間が、少なくとも一部は、まるで自身の中でもう一方の行為を具体化しているかのようである。うまく共同作業をしているとき、人間と人間以外の存在の行為は、強制されているのではなく、共に生み出されている。ここには、神経筋のパターンを反映する相互の絡み合いと相互の情緒がある。主体は、境界づけられた個人ではなく、他者の経験のうちに溢れ出て直接的に相互に影響し合うのである。

また、バークとホルムバークは、次のようなスーザン・スチュアート（Susan Stuart）の“2つの神経システムの間結合”についての議論も取りあげる（p. 122）。スチュアートは、個人間の生理学的な共振に拠って立つ身体の相互性を強調している。人間と動物の関係における間身体性においても、同様に対話的な関係と神経筋のダイナミックな流れがある。それは多感覚的なものであるが、とりわけ、触覚によって影響を受けあう。馬と人間、あるいは、人と犬と一緒に動くとき、深い物質的な変化が進行し、生物学的な流れが出会いを生み出合いによって生み出され、個々の身体を超え出でる。ここでは、たとえば、神経システム機能、免疫反応、ホルモン分泌において、互いに影響し合うような変化が生まれると考えられるのである。

これらの議論を受けたバークとホルムバークは、身体性について以下のように論じている（pp. 122-123）。

当初は本質主義に対する危惧があったが、フェミニスト理論家は今では以前より生物学に関わるようになっており、身体を非常に浸透性が高く可塑的なものとして考えるようになっていく。そうした様々な洞察は、ヒューマン／アニマル・スタディーズ、そして、特に緊密な種の間に出会いに焦点を当てる者にとって興味深い考えを切り開く。乗馬者が、身体経験の観点から、筋肉、神経、腱を通じて馬を“感じる”と語る場合、それは正確には何を意味しているのか。確かに、動物は、しばしば、人間の身体から非言語的で非意図的な合図を受け取る。たとえば、馬を扱う人の心拍数が上がると、馬は自身の心拍数を上げる。たとえリードロープでつながっているだけだとしても、人間の筋肉の緊張のうちの静かな変化が、動物には容易く分かるのである。

それらの間身体的な感覚もちろん権力の網の中に組み込まれている。たとえば、先に挙げたキャット・レディたちに戻ってみよう。知ることと感じることの相互作用が、“感覚の管理”を通じて評価が貯えられた現象としての犬や猫との関係の中で機能している。そして、その相互作用はまた、感覚によって構築された知識に基づいて、適切な生活、および、人間と動物の関係に関する支配的な規範を強化している。この説明は、熟練した者たちが、いかに、見る、聞く、感じる、嗅ぐなどの感覚を認識と管理の方法として利用しているかを示している。すなわち、知識、感覚、権力は手と手を携えているのである。しかしながら、知識が貯えられていく際には、犬と猫はまた、野生的で、しばしば権威と共同することを拒む。したがって、とりわけ種の間に出会いが考慮に入れられるとき、間身体性と異種的な印象は、交差性を明らかにする。様々な人間と動物の身体が、相互に作用し、その状況についての知を生み出しているのである。

3. 権力と責任

バークとホルムバーグが最後に取りあげるのは、「権力と責任（responsibility）」という論点である。バークとホルムバーグによれば、動物が間違いなく社会生活の一部であるとするならば、そこには道徳的な含意があり、どの程度まで“権利”，あるいは、市民権が認められうるのかが問われることになる（p. 123）。しかし、動物の権利をめぐる言説は次のような理由から問題含みである（p. 123）。第一に、それらは積極的な関係の義務について何かを言うというよりはむしろ、消極的権利に基づくものである。第二に、フェミニスト的観点からすれば、権利の言説は、自由主義的でヒューマニスト的なパースペクティブであり、男性的な規範がしみこみ絶望的に人間中心主義である⁽¹⁾。

そこで、バークとホルムバーグは、ハラウェイが、フェミニストは、ブリーディング、食肉生産、動物実験、屠殺など政治的に責めを負わされているものを含め、責任ある実践を発展させることに関心を払うべきと考えていることに注目し、以下のように論じる（pp. 123-124）。

ハラウェイが指摘するように、責任は、応答に基づいている。そうした能力は、ただ多角的な関係性において多角的な関係性のために、共有される。その関係性においては、常に複数の応答的な共同行為者が生成の過程にある。人間存在が、もっぱら責任を負っているわけではなく、責任を与えられているわけでもない。すなわち、あらゆる世界の動物が、人間と同じ意味で応答が可能である。つまり、責任と

は、相互行為の中でつくられる関係性であり、主体と対象が存在するようになる関係である。かくして、人間と動物は責任を負うことが可能であるが、それはまた、彼らは応答する能力があるがゆえに責任を負うことが必要であることを意味するのである。

ハラウェイは、その用語が非ヒエラルキー的であることを示唆しているにもかかわらず、関係が権力の内に組み込まれており、利害は常に衝突することを認識している。この立場を真摯に受け止めるならば、人間一般は、人間／動物の諸関係に対してより多く応答する能力をもっていることを意味する。そして、応答／責任の能力をもつことは、ケアの倫理 (ethic) を意味する。フェミニストのケア・エシックスにおいては、“苦痛の原因となっている政治的・経済的なシステムに対する配慮”を含め、“配慮 (attention)” がキー概念であるという議論がなされてきているのである⁽²⁾。

ケア・エシックスを保持する、すなわち、責任を負うということはまた、アカデミックの観点からすれば、説明責任 (accountability) を負うことを意味する。この問題はフェミニストの研究者の間で議論されてきたものであり、研究される人々への説明責任をともなう責任ある研究をいかに行うかが問われてきた。フェミニストたちは、説明責任を負う研究とは、研究者が研究の対象者から距離をおくのがよいという客観主義的な仮定を拒否する研究であると論じてきた。さらに、それは、異なる段階の研究対象者を含むものであり、また探究される共同体の中にいる研究者を含むものである。

一方、バークとホルムバーグは、我々が人間と動物の関係をどれほどに研究しようとも、我々はまた、“それは動物にとってどのようなメリットがあるのだろうか”と問うことになるであろうと言う (p. 125)。そして、この問いについて考えることは、動物が考えるであろうことを考えることになるのみならず、我々の探究が変化を引き起こす助けとなっているのかどうかを考えること、すなわち、我々の、動物やその能力についての考え方、動物の扱い方、動物の生きる場所に対する尊重の状況、あるいは、尊重をしていない状況における変化を引き起こす助けとなっているのかを考えることであると論じる (p. 125)。

バークとホルムバーグよれば、説明責任というのは容易なものではなく、研究されるのが人間であるかないかで、権力のアンバランスが避けがたく存在するがゆえ、この文脈では、ガヤトリ・C・スピヴァック (Gayatri C. Spivak) のサバルタンと否定されている声についての理論 (Spivak, 2006) を思い起こすことが重要である (p. 125)。そして、バークとホルムバーグは次のようにも述べる (p. 125)。“我々”は、そもそも“彼ら”のために語るべき／語ることができるかどうかと問わなければならないが、それにもかかわらず、説明責任は、アニマル・スタディーズの研究者がフェミニズムの学者から有意義に学ぶことができる重要な問題であると言うことができる。フェミニスト研究者に対して重要な挑戦をし続けるのも、人間ではない他者を含めた、他者に対する説明責任の問題である。我々は、我々の生がいかに他の種の生と関わり合っているかを語るだけでは十分ではない。それでは単に知的なエクササイズであり、我々の理論は説明責任が果たされないままであろう。我々は、我々と他の種との関係が元来搾取的であり、多種多様な支配の層に組み込まれているにもかかわらず、伴侶種と生活をともにする多くの人が証明するように特殊な関係において愛着と愛情をもちうることが心に刻む必要がある。さらに、

その構図を複雑にしているのだが、フェミニストの思想家たちは、我々に、愛情とケアは権力関係を排除しないと教える。反対に、ケアの関係性は、常に予期しうる形ではないが、定義上非対称的なのである。

IV. 「種のコスモポリタニズム」再考

本節においては、クリティカルなポストヒューマニズムの立場から提唱されているナーヤルの「種のコスモポリタニズム」を、バークとホルムバークのヒューマン／アニマル・スタディーズとフェミニズムに関する考察と照らし合わせつつあらためて振り返ることとする。

ナーヤルはまず、人間というカテゴリーが、動植物や機械を排除することにより構築されているとする（Nayar, 2014: 30）。つまり、主体としての人間は、実際は混成物であり、人間の境界とアイデンティティを規定するために排除してきた諸々の存在によって構築されているという考えを示すのである。そのうえで、「種のコスモポリタニズム」は、ジェンダーであれ（男性／女性）、生物の形式であれ（動物／人間、人間／植物）、構成要素であれ（有機体／非有機体）、安易な二項対立を拒絶すると論じている（Nayar, 2014: 152）。

バークとホルムバークにおいても、動物を〈単一で固定的な他者〉として二項対立的に位置づけることは厳しく批判されている。バークとホルムバークの動物のアイデンティティに関する分析は、動物というアイデンティティが、いかに人間のカテゴリーから分離して構築され、いかに人間の例外主義を構築しているかを明らかにする。その分析はまた、たとえばペットのカテゴリーに関しても、人間というカテゴリーと同様その境界線は動きうるし交渉によって設定されることを明らかにしており、動物を人間と関わり合う複合的で流動的な主体と見ることを可能にしている。バークとホルムバークは、こうした分析をヒューマン／アニマル・スタディーズとフェミニズムの考察を通して示したのであるが、それらのアイデンティティをめぐる議論とナーヤルの「種のコスモポリタニズム」の前提となる主体の議論とは軌を一にするものと言えよう。

また、ナーヤルは、すべての種は、常にすでに、連続体の結び目で交点であり、借用された特徴、遺伝子、行動で満たされたものであるという考えを提示している（Natar, 2014: 152）。ナーヤルによれば、主体は、常にすでに、接続性のダイナミズムの中にあるのである（Nayar, 2014: 154）。こうした議論は、諸々の主体は物質レベルで相互に絡み合いつつ存在することを示していると見ることができる。

一方、バークとホルムバークの間身体性という概念も、ナーヤルの示したような物質の次元での絡み合いを把握する概念と捉えることができるであろう。バークとホルムバークの分析は、主体としての動物と人間が身体的な相互関係性の中で生み出されるという認識をもたらす。バークとホルムバークの議論もまた、ナーヤルと同様、物質的な次元において人間と動物が分かち難く結びついていること、言い換えれば、‘動物’、あるいは、‘人間’と境界づけられた身体を超え出でるようなダイナミックな接続が生じていることを示しているのである。バークとホルムバークによれば、たとえば、神経システム機能、免疫反応、ホルモン分泌において、互いに影響し合うような変化が生まれるのであり、そうした身体的

な相互作用こそが関係性を成り立たしめ、同時に動物と人間を主体たらしめるのである。

それでは、権力と責任の問題、そして、ケア・エシックスについてはどうであろうか。これについても十分な呼応が認められる。ナーヤルのクリティカルなポストヒューマニズムにおいては、非人間的な存在に対する倫理的な応答と責任が要請されており（Nayar, 2014: 8）、その帰結が「種のコスモポリタニズム」である。ナーヤルは、生物の諸形式を「動物」「植物」「人間」に分けカテゴリー化する規範的な主体は、その排他主義のために精査が加えられるようになっていていると論じ、生物の諸形式のヒエラルキーの配置のあり方、その結果の搾取と根絶を問いただすという明確な戦略を取るのである（Nayar, 2014: 8-9）。

バークとホルムバークもまた、主体としての人間と動物の関係における非対称性、そして、そこから要請されるケア・エシックスについての洞察を提示する。アイデンティティと間身体性の分析により際立つことになったように、動物を主体として捉え、人間と動物の関係を交差性の概念の下で考えることはその関係の非対称性に目を向けることである。そして、ケアは、その関係性における非対称性に基づき、人間が、より大きな応答する能力と責任とをもつこと、および、その応答の能力と責任に基づき動物への責任ある実践を発展させることを含むのである。

しかしながら、ナーヤルはバークとホルムバークの議論には認められない論点も提示している。ナーヤルは、そうした論点の1つを、オクタヴィア・バトラー（Octavia Butler）がその小説において示した考えに言及しつつ論じている。

ナーヤルによれば、道徳的トランスヒューマニズムは人間の内面の哀れみを感じる能力やケアの能力を増強する必要があることを強調するが、それに対して、バトラーのクリティカルなポストヒューマニズムは、種差別と他の差別的実践の間の関連を認識することによって、他の種や生物との関連性と相互性を考察し直すことを強調する（Nayar, 2014: 156）。つまり、バトラーのポストヒューマニズムにおいては、人間の性質は、常にすでに、多種のである（Nayar, 2014: 156）。しかし一方で、ナーヤルは、リアリスト的ユートピア主義者であるバトラーが、多種のアイデンティティを道具的に利用することに対し注意を促していることに目を向ける（Nayar, 2014: 156）。ナーヤルがバトラーの作品から読み取っているのは、道徳的なトランスヒューマニストたちが考える道徳的に強化された人間がそうなるであろうように、「多種のアイデンティティ」が新たな権力となり、抑圧の軸を作り出すことへの危惧なのであろう。

また、ナーヤルは、シェリル・ヴィント（Sherryl Vint）の議論から、「種のコスモポリタニズム」を単純に賛美することへの警告を受け取る（Nayar, 2014: 156）。ナーヤルによれば、「種のコスモポリタニズム」は、バンパイアであれ、バクテリアであれ、人間であれ、エイリアンであれ、それぞれの種が生きることを可能にするものである（Nayar, 2014: 156）。しかしながら、ナーヤルにとって、「種のコスモポリタニズム」は、「種の調和」に関するものではなく、「相互の消費、相互依存の関係性のうちにありつつ、ある種を倫理的なジレンマなく残酷に搾取されるような対象にしてしまうことなく生きるための非常に複雑な方略（Vint, 2010: 28）」なのである（Nayar, 2014: 156）。

こうしたナーヤルの「種のコスモポリタニズム」は、動物を食べ物として利用することを完全にやめべきと考えるようなケア・エシックスとは異なり、「相互の消費」のうちにあることを否定するものではないであろう。むしろ、「相互の消費」を前提としつつも、ある特定の種を「倫理的なジレンマなく残酷に搾取されるような対象」にしてしまわないこと、それを「応答と責任」と考えることにより、「種のコスモポリタニズム」を単純に賛美するといった陥穽に陥ることを避けようとしていると考えられるのである。

V. おわりに

本論ではまず、アニマル・スタディーズとフェミニズムの関連を論じたバークとホルムバーグの論考を取りあげ紐解いた。バークとホルムバーグの動物のアイデンティティに関する分析は、動物を人間と関わり合う複合的で流動的な主体と見ることを可能にする。また、間身体性に関する分析は、動物と人間を主体として生成させる基盤が身体的な相互関係性のうちにあること、すなわち、物質的な次元の接続こそが人間と動物を主体たらしめていることへの洞察をもたらす。そして、権力と責任に関する分析は、主体としての人間と動物の関係における非対称性、そこから要請される動物への「責任と応答」の非対称性についての洞察をもたらすのである。

本論はまた、こうしたバークとホルムバーグの論考とナーヤルの「種のコスモポリタニズム」とを照らし合わせることを試みた。そうすることを通じて、クリティカルなポストヒューマン主義の立場に拠って立つナーヤルの「種のコスモポリタニズム」の中核にある論点をあらためて確認することができたと言えよう。同時に、そうした照らし合わせは、ナーヤルの「種のコスモポリタニズム」にのっての「責任と応答」とはどのようなものであるのかを浮かび上がらせることにもなった。すなわち、「相互の消費、相互依存の関係性のうちにありつつ、ある種を倫理的なジレンマなく残酷に搾取されるような対象にしてしまわないこと」、これこそがナーヤルの「種のコスモポリタニズム」における「責任と応答」の核心であることが明らかになったのである。

今後は、ポストヒューマン・エシックスとしての〈動物倫理〉の具体的な形をさらに探究していきたい。

注

- (1) これはロージ・ブライドッティ (Rosi Braidotti) の議論を参考にした議論である (Braidotti, 2006)。
- (2) ジョセフィン・ドノバン (Josephine Donovan) とキャロル・J・アダムス (Carol J. Adams) の議論 (Donovan and Adams, 2007) がその例として挙げられている。

引用文献一覧

Birke, Lynda, and Tora Holmberg (2018) "Intersections: The Animal Question Meet Feminist Theory." In Cecilia Åsberg and Rosi Braidotti (eds.), *A Feminist Companion to the Posthumanities*, pp. 117-128.

- Cham, Switzerland: Springer.
- Braidotti, Rosi (2006) *Transpositions: On Nomadic Ethics*. Cambridge: Polity Press.
- Donovan, Josephine, and Carol J. Adams (2007) *The Feminist Care Tradition in Animal Ethics*. New York: Columbia University Press.
- Haraway, Donna (2003) *The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness*. Chicago: Prickly Paradigm Press.
- 〔邦訳：ダナ・ハラウェイ（永野文香訳）『伴侶種宣言—犬と人の「重要な他者性」—』以文社, 2013年〕
- (2007) *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 〔邦訳：ダナ・ハラウェイ（高橋さきの訳）『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス—』青土社, 2013年〕
- Higgin, Marc (2012) “Being guided by Dogs.” In Lynda Birke & Jo Hockenhull (eds.) , *Crossing Boundaries: Investigating Human-Animal Relationships*, pp. 73-88. Leiden: Brill.
- Nayar, Pramod K. (2014) *Posthumanism*. Cambridge: Polity Press.
- Smart, Carol (2011) “Way of Knowing: Crossing Species Boundaries.” *Methodological Innovation Online* 6 (3) , 27-38.
- Spivak, Gayatri Chakravorty (2006) *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. London: Routledge.
- 〔邦訳：ガヤトリ・C・スピヴァック（鈴木聡・大野雅子・鶴飼信光・片岡信訳）『文化としての他者』紀伊国屋書店, 1990年〕
- Stuart, Susan (2013) “The Union of Two Nervous Systems: Neurophenomenology, Enkinaesthesia, and the Alexander Technique.” *Constructivist Foundations* 8 (3), 314-323.
- Vint, Sherryl (2010) *Animal Alterity: Science Fiction and the Question of the Animal*. Liverpool: Liverpool University Press.